中欧研修事後レポート

城西国際大学大学院
国際アドミニストレーション研究科
渡邊卓矢

今回の研修はゴールデンウィークの前後を含む約２週間の期間で、中欧の国々をまわった。筆者自身これらの地域には過去に研修や留学等で訪れた経験はあったが、国を転々とするのは今回がはじめてだったため、非常に良い経験ができた。今研修でははじめに、日本からウィーンに入りその後チェコ第 2 の都市であるブルノ（Brno）に滞在し、スロヴァキアの首都であるブラチスラバ（Bratislava）へ行き、最後にハンガリーの首都ブダペスト（Budapest）に滞在した。

初めに滞在したウィーンでは１日半の滞在であったが、市内散策や博物館見学と密度の濃い時間を過ごせた。筆者はウィーンを訪れるのが初めてであったためその期待値は高かった。また、ウィーンはハプスブルク帝国時代の首都であったり、美術・建築面でもウィーン分離派（セセッション）が生まれたりと興味をくすぐるもので溢れていた。市内散策ではハプスブルク帝国の王宮であった、ホーフブルク宮殿を訪れその圧倒的な存在感からハプスブルク帝国の偉大さを実感させられた。また、市内を歩きながらウィーンという都市の美しい街並みも見ることができた。初日の夕食にはヴィーナー・シュニッツェルを食べた。その土地の伝統料理を食することもその国や地域を知る方法のひとつであると筆者は考えている。次の日はブルノへの移動があったが、約半日の自由行動があった。筆者は再びウィーンの市街地へ赴き、セセッション館を見学したり、馬車に乗って市内を観光したりした。セセッション館は建物そのものがセセッション様式で建てられており、その美しさなどを感じることが出来た。館内にはグスタフ・クリムト（Gustav Klimt）のベートーヴェン・フリーズ（Beethoven Frieze）を間近で見ることもでき作品の壮大さをまじまじと感じた。セセッション館見学後はホーフブルク宮殿近くから馬車に乗り市内ツアーを経験した。馬車に乗っていると当然ながら歩いていたときよりも目線が高くなり、また違った景色を見ることが出来、まだ自動車が普及する前の馬車を常用していた時代にタイムスリップしたかのような感覚を味わいつつ当時に思いをはせていた。

その日の午後、ウィーンからチェコのブルノへはバスで移動した。バスでの移動は２時間ほどで、徐々に変わっていく街並みを横目に見ながら次の目的地へ期待を募らせていた。当然ながらバスでの移動では国境を超えることになる。このヨーロッパにおける「国境」というものも今回の研修の目的の一つであった。オーストリアから少しずつチェコの国境に近づくにつれて、周りの言語表記（例えば看板や標識など）も変化していき国境はまだか、まだかと待ち望んでいた。しかし、いざ国境を超えるとなった瞬間はあっけなかった。

気が付いたら国境を越え、チェコ内に入っていたのである。その感覚は日本で例えるなら県境を越える程度のものだった。

ブルノでの滞在は５日とこの研修のなかでは一番長かった。それだけに一番記憶に残っている。到着後は夕方だったこともあり、その日は自由行動だった。その日の夕食はチェコ料理とチェコの地ビールを楽しんだ。２日目の午前中はブルノ郊外にあるトゥーゲンハット邸（Vila Tugendhat）を見学した。トゥーゲンハット邸は 1928 年にユダヤ系の実業家であったフリッツ・トゥーゲンハットとその妻アルフレダが設計を依頼し、ドイツ出身の建築家ミース・ファン・デル・ローエが設計を手掛け 1930 年に完成した。この邸宅はモダニズム建築の原点とも言われ、近代建築の名作とも言われている。ガラスに囲まれた姿はとても美しく本当にこれがおよそ 100 年前に建てられたものなのかと疑いを持つほどであった。内部には近代建築の要素を感じさせるものばかりで、とくに庭に面したガラスに面した部屋では、書斎、ダイニング、応接間が壁で仕切られることなく上手く組み合わされていた。しかし、この建物とその所有者トゥーゲンハット一家は不運な運命を辿ることになる。トゥーゲンハット一家はユダヤ系であったため、ナチス・ドイツの迫害を恐れスイスへと亡命した。一家が再びこの邸宅に戻ることはなかった。家主を失った邸宅はその後、ナチス・ドイツに占領され、第二次世界大戦でドイツが敗れてからはロシア人たちが占領した。この占領期間のうちに邸宅はひどく荒らされたという。1955 年にチェコスロヴァキア国有になり子供たちへの再教育の場として使われた。1963 年に国の歴史的文化財に指定され修復が行われたが、その修復は困難を極めたという。また、このトゥーゲンハット邸は 1992 年にチェコスロヴァキアの解体のための調印式の場としても使用された。その後 2001 年にトゥーゲンハット邸は世界遺産に登録された。

その日の午後はマサリック大学でジーデック先生の講義を受けた。講義内容はチェコの経済史とくに 1948 年から 1989 年の経済を中心に話が進んだ。チェコ（チェコスロヴァキア）は 1948 年から 1989 年までの 41 年間社会主義国家として旧ソ連の衛星国として存在していた。講義では社会主義時代の経済がどのようであったか、またその後どのようにして自由経済へと移行していったのかなど興味深い内容であった。講義後はジーデック先生と希望者でブルノ市内の散策をした。市内散歩ではブルノ高台にあるシュピベルグ城、聖ペテロ聖パウロ大聖堂、旧市庁舎、カプチンスキー広場、自由広場を先生の解説を聞きながら散策、見学した。その日の夜はマサリク大学の日本語学科の学生たちと夕食を共にした。

翌日はバスでコプシヴニツェへ行き、タトラ博物館を見学した。タトラはチェコの自動車メーカーで、特に大型トラックの分野で東ヨーロッパを代表するメーカーだった。タトラは高位共産党員の高級車として使われた乗用車も手掛けていたが、戦後の社会主義時代の計画経済により乗用車の生産を制限され 1998 年乗用車分野から撤退した。逆に乗用車の生産はシュコダ社へ集中した。博物館は多くのコレクションがあり、乗用車やトラック、エンジン、デザイン案、歴史的な写真など非常に幅広い展示物を見ることが出来た。

ブルノ滞在中１日だけ自由日があり、その日は希望者でプラハまで出かけた。やはり、

プラハという町はいつ訪れても美しい。プラハの滞在は半日程度と短かったが、カレル橋、プラハ城、ヴァ―ツラフ広場、旧市街の時計塔など有名なところはまわれたので有意義なものであった。その翌日はマサリク大学の日本語学科の授業見学をした。筆者は学部時代日本語教員の過程を履修していたこともあり、現地の日本語学科の授業に興味があった。授業見学は二日間参加させて頂き、会話の授業、漢字のテストの授業風景を見せていただいた。

その後、スロヴァキアのブラチスラバへ移動した。スロヴァキアの滞在は二日間と非常に短かったが、ハンガリー、スロヴァキア、オーストリアの三国の国境地帯に足を運ぶなど密度の濃い時間だった。国境地帯は川を挟んだ国境や陸続きの二か国の国境は何度か訪れたことがあったが、今回のような三か国の国境がかさなる地点へは初めてで不思議な感覚があった。その地点は特に何か建物や柵があるわけではなく様々な像があり、国境の重なるところに目印があるだけだった。スロヴァキア滞在は短かったが、過去に知り合った友人に再会できたり、三か国の国境が重なる国境地点へ足を運んだり、ブラチスラバ市内の観光をしたりと内容のつまった滞在だった。

スロヴァキアから最終目的地ハンガリーのブダペストへ移動した。筆者はブダペストを訪れたのは今回が初めてで、とても期待を持っていた。ブダペストの街並みはこれまで滞在していた中欧の国々とは異なり、「都会」の印象を受けた。また、初日にブダペストの夜景も見ることができ、非常に美しい街並みだと感じた。ブダペスト滞在中は、国際交流基金への訪問や、エルテ大学の日本学科の授業見学、元駐日ハンガリー大使による講義などで、その中でも筆者が一番関心を持っていたのが、ユダヤに関する講義と市内散歩であった。

筆者のユダヤに関する知識はそれほど深いというわけではないが、単純にユダヤに関しては興味が昔からあった。筆者の通っていた中高はキリスト教系の学校であったため、聖書の授業があった。その中でユダヤ教に関して少しだけ触れてあったり、あとは世界史で習うようなユダヤ人に対する迫害、第二次世界大戦中のナチス・ドイツによるホロコーストなど他の人とたいして変わらない程度だが、中でもユダヤ教に関して興味を持っていた。今回の講義や引率教員の個人史、ブダペスト市内の散歩は筆者にとって非常に興味をくすぐるものだった。講義を受ける前に引率教員から『ロシア、中・東欧ユダヤ民族史』をお借りしていて、その本を読んでいるうちに中身にどんどん引き込まれていった。講義ではこれまで知らなかったユダヤ、特にハンガリーのユダヤ人に関する様々な話を聞くことができ非常にためになった。

18 世紀ごろ多くのユダヤ人はウィーン、ブダペスト、ベルリンなど中東欧地域に集中していたという。このころのユダヤ人たちの主な仕事はキリスト教徒がしないような商売や金貸しなどの仕事だったという。1873 年にブダペストが成立後は多くのユダヤ系の人々が流入し、1910 年のハンガリーの総人口の約 4 割（およそ 20 万人）がユダヤ系であったという。ハンガリーに住んでいたユダヤ人たちはハンガリー経済に大きく貢献し、ハンガリー

初の銀行はユダヤ系人物がはじめたなど、多くのユダヤ人実業家たちはハンガリー経済に貢献したという。例えばThe Weiss Familyは製鉄業を営んでおり、両大戦間期には武器製造で活躍した。また、The Hatvany-Deutsch家は製糖・製粉業をいとなんでおり、巨額の富を得、貴族の地位を得たという。また、自分たちの財産をユダヤの文化のために寄付も行っていた。1900年頃の投資家に目を向けてみると、その約79%もの人がユダヤ人であった。当時のユダヤ人たちは「教育によって社会に同化できる」と信じており、1910 年頃の統計ではハンガリーに住む約 9 割ものユダヤ人が自分たちはハンガリー人であると回答したという。また、ユダヤ系の名前から改名する者もいたという。このようなユダヤ人たちの変化はユダヤ教にもみられた。改革派のユダヤ教徒は新たなシナゴーグを古典的なものと異なり、キリスト教の教会に近づけた。礼拝で行われる説教もヘブライ語からハンガリー語に変化していた。また、ユダヤ教の聖典であるトーラはハンガリー語に翻訳されてはいたが礼拝では使われていなかった。

ユダヤ民族は時代の流れに翻弄され様々な苦難を経験してきた。ここまでは、ユダヤの人々が比較的自由に活動し、ハンガリーの町に溶け込んでいる様子であったが、1944 年にハンガリーで親ナチス政権の誕生により状況は一変する。政権誕生後、ユダヤ人たちは再びゲットーに住まわされ、劣悪な環境下で過ごさなくてはならなくなった。これによりおよそ数万もの人が死亡したといわれる。また、1940 年代に約 20 万人いたユダヤ人は 1945 年には半分の 10 万人にまで数を減らしてしまった。しかし、ハンガリーのユダヤ人は他の中欧地域のユダヤ人と異なりアウシュビッツなどの強制収容所に送られるまでに時間がかかっていたことなどこれまで知ることがなかった話なども講義から知ることが出来た。また、講義後は実際にブダペスト市内を散歩し、改革派のシナゴーグへも足を運べたのは非常に貴重な経験だった。

今回の研修は同じ中欧をくくられた国々をまわり、隣り合う国同士で異なった歴史、文化、習慣があるというのが身をもって体感することが出来た。筆者はこれまでチェコに対して関心を強く持っており、チェコにもユダヤ人居住区が存在しており、そこに住んでいたユダヤ人たちはハンガリーのそれとはまた異なった歴史をたどったはずでそれについて今後調べてみたいと感じた。

参考資料

大津留厚　『ハプスブルク帝国』　山川出版社　1996 年
柴　宜弘／伊東孝之／南塚信吾／直野　敦／荻原　直　監修　『新版　東欧を知る事典』　平凡社　2015 年
薩摩秀登　『チェコとスロヴァキアを知るための 56 章』　明石書店　2003 年
プレプク・アニコー著　寺尾信昭訳　『ロシア、中東欧ユダヤ民族史』　彩流社　2004 年

写真

mytaxi